

平成二十九年年度 福祉作文コンクール

最優秀賞 「幸せの種」

釜石市立唐丹中学校

二年 一関 理帆（いちのせき りほ）

私は、中学生になってから、夏休みと春休みに行われる「お茶っこでアーカイブ」という朗読ボランティアに参加している。最初は先生が、「これに参加したら、意欲点アップ」とおっしゃっていたので、ボーナス点ねらいで参加した。ボーナス点が入るし、ほかの人が作った文章を読むだけ。それならば私にもできるだろうと、簡単に考えていた。

数日後、私が読む文章が渡された。その文章は、東日本大震災の出来事を未来へ伝えつなぐために書かれたものだった。ただ読めばいいだけだと思っていた。しかし、文には想いと知恵がこめられていた。どこへ逃げたらいいのか、自然災害にあったとき本当に大切なのは、人と人とのつながりだということ。それらはすべて、今の人の、未来の人々に幸せになってほしいという思いがこめられていた。震災のことは、未来へ伝えなければならぬことだった。伝えることで未来の人々が助かって、幸せを感じられるのだ、そう思った。

心をこめて書かれた文だ。わたしも、心をこめて、伝えられるように読まなければ。そう考えて、どうしたらうまく伝えられるのか、どうしたら、未来の誰かを幸せにできるのか、しっかりと考えて、意識して読んだ。初めてで、途中で間違えてしまったが、心をこめて読めたと思った。

今年もまた、それに参加した。そして、今年は福祉作文を書くことにした。書くときには福祉とは何なのかが気になった。私の中のイメージだと、障害者や、お年寄を大切にする、というようなものになっている。本当はどうなのだろうか。調べてみると、はっきりした定義はないが、福も祉も幸福を意味する字で、それを合わせた、福祉というのは、人を幸せにするという意味を持っているようだった。

今年は、福祉の意味と私が朗読ボランティアをしている意義を考えて読んだ。

私は誰のために読むのか。何のために読むのか、読むことに意味はあるのか。考えたすえに、私の中でこうまとまった。

私は、未来の人々を幸せにするために読むのだ。これは、ただの音ではない。私たちの想いなのだ。伝わってほしかった。

震災のことを伝えることは、逃げる場所、人と人とのつながりがあればまた、何度でもやりなおせること、そして、負けない気持ちを伝えることでもある。たくさん幸せの種をまくことだと思った。

これまで私たちも、昔の人たちがまいた幸せの種のおかげで助かってきた。

震災のことを思いだし、伝えるのには、少し勇気がある。それでも種をまくのは、本当に未来の誰かに幸せになってほしいから、そして、昔への恩返しがあるからだろう。だから、私たちは幸せの種をまく。未来の誰かがそれに気づいて、幸せを育てていく。そうして、育った幸せは、津波にだって負けないだろう。

私は、幸せの種をまくことを考えて、文章を読んだ。ほんのすこしだけ、未来の誰かを幸せにできた気がした。

平成二十九年 度 福祉作文コンクール

優秀賞 「ひいばあちゃんのお手つだい」

釜石市立甲子小学校

二年 村上 翔（むらかみ かける）

ぼくには、おばあちゃんが、二人います。おばあちゃんとひいばあちゃんです。ひいばあちゃんは、九十三さいです。ふだんはおばあちゃんひいばあちゃんのせわをしています。たまに、けんかになることがあります。ひいばあちゃんがわがママをときどき言うからです。

三時のおやつに、

「どうもろこし、くいたい。」

と、いきなり言いました。おばあちゃんは、いそいでどうもろこしを、とどけました。

うなぎごはんのときに、うなぎだけいっぱい買ってごはんははんぱにたべました。

ぼくがごはんを、もっていくと、よろこびます。おこっていたのに、えがおになります。

もってきてよかったとおもいます。

学校でキュウリをぼくがそだてました。一学きに、しゅうかくしました。二本とれました。ひいばあちゃんに見せました。

「みそキュウリでたべよう。」

と言いました。おいしかったです。ぼくは、キュウリをきりました。ひいばあちゃんはちよつとミニサイズにしました。

ひいばあちゃんはよくテレビを見ます。

ぼくがテレビを見ていると、

「一チャンネルにかえろ。」

と言います。しようがないから、リモコンをかします。天気よほうを見てます。

六月ごろに、へやでころんで足をいたくしました。びょういんに行ったきりなかなかかえってこなかったの、心ばいになって、

「バーバ、しぬの。」

と、ぼくが言うと、おかあさんは、

「だいじょうぶ。しぬわけないよ。」

と言ったけど、このままあるけなくなったらどうしようと思いました。だから、ひいばあちゃんのお手つだいを、いっぱいしようと思いました。

おばあちゃんの家に行ったときは、おそうじをしてあげています。せんたくぼしもお手つだいでいます。ぼくがいろいろなお手つだいをすると、ひいばあちゃんは、

「きれいだ。」

と言って、よろこんでくれます。

夏休みに行ったとき、ひいばあちゃんは、シルバーカーをおして、ぼくがいるへやまで一人であるいてきました。ぼくのべんきょうを見に来ました。だからぼくもがんばってべんきょうをしました。

火よう日と金よう日は、ひいばあちゃんは、かま石ニチイケアセンターに通っています。おふろに入るし、ぬりえもするそうです。たのしそうです。

ひいばあちゃんがうれしいと、ぼくもうれしい気もちになります。

ひいばあちゃんがあると、あんしんだからながいきしてほしいと思います。

平成二十九年 度 福祉作文コンクール

優秀賞 「ありがとう おばあちゃん」

釜石市立唐丹中学校

一年 上野 真穂 (うえの まほ)

とつぜん悲劇がおそいかかってきました。八月十七日、祖母は七十六歳で亡くなりました。七時三十六分でした。亡くなる前日にはあと一週間もつかわからないといわれました。体調が悪かった祖母は亡くなったその日に入院する予定でした。でも、それまでもちませんでした。

私は祖母が亡くなりふっと思いました。自分なりに祖母につくせたのかと。

私の祖母はとてもがんばり屋でした。いつも、笑顔を絶やさず元気でした。私は覚えていないのですが、私が小さい頃は祖母がお風呂に入れてくれていたそうです。

祖母はたくさん苦難を乗り越えてきました。何度も病気をわずらい入退院をくり返しました。それを支えていたのが祖父の存在でした。祖父と祖母は表ではけんかしながらも一日一日を大切に過ごしているように思いました。祖父は強い口調ですが、祖母のことを第一に考えているやさしい心をもっています。

その、祖父や祖母との生活で私の心に残ったことは四つあります。

一つ目は、祖父と祖母のやりとりです。祖父が祖母の近くで長いおならをして、私やお母さんが笑った後に祖母が大笑いしていたことが心に残っています。あまり笑わない祖母が笑ったのが印象的でした。

二つ目は、私と祖母が同じベッドで寝たことです。私は寝相が悪い方なので祖母をけったりしないか心配でしたが起きたときに祖母にきいてみたら、「大丈夫だったよ。」とやさしく言ってくれました。私も祖母といっしょにねるとぐっすり眠れました。私が祖母が寝ているときにむりやり入ってもやさしくうけいれてくれました。

三つ目は、祖母の誕生日のときの出来事です。私たち兄弟は祖母に手紙で思いを伝え、クッションをプレゼントしました。その時に祖母は私たちに感謝の言葉を何度も言ってくれました。

四つ目は、祖母をお風呂に入れたことです。祖母は病気の影響でだんだんと歩けなくなってきたので母と私で時々お風呂に入れていました。そうすると、祖母はやすらかな顔で湯ぶねに入っていました。それが心に残っています。

最後に祖母に伝えたいことは、「私が祖母につくせたのかは分かりません。だから、かわりに祖父を大切にしていき、祖母が安心できる環境をつくっていきます。天国から私たちのことをいつまでも見守っていてください。」

佳作 「さわこ訪問を体験して思ったこと」

釜石市立栗林小学校

四年 川崎 愛香（かわさき あいか）

私たち、三・四年生は、九月七日にグループホームさわこに行ってきました。

栗林小学校では、毎年、三・四年生がさわこを訪問し、おじいさん、おばあさんと交流をふかめています。

グループホームさわこは、私たちの学校から、上栗林方面に向かって歩いて十分ぐらいのところにあります。

私たちが、さわこに着いたとき、大きな窓から、おじいさん、おばあさんの姿が見えました。私は、わくわくしながら、玄関まで歩いていきました。

玄関に入ると、介護士の方が、私たちをむかえてくださいました。そして、くつをぬいで、三・四年生全員が上ぐつにはきかえ、水のみ場で手をよく洗って、おじいさん、おばあさんのいる部屋に入っていきました。

さわこのみなさんは、おじいさんが一人、おばあさんが八人、職員の人や介護士の人たちが五人いました。

始めに、私たちから歌のプレゼントをおくりました。一曲目は、「夢の八分休符」、二曲目は、「君の名前」を歌いました。私たちの歌で拍手がおこりました。また、涙をうかべていたおばあさんもいました。私は、「練習してきてよかった。喜んでくれている。うれしい。」という思いになりました。

次は、おじいさんとおばあさんが、「花笠音頭」をおどってくれました。九人全員が花笠を手にして、椅子にすわりながらのおどりでしたが、一生けん命手を上げたり、下げたりしていました。少し手を上げるのが大変そうなおばあさんもいましたが、九人そろっての動きを見て頑張る様子が私にも伝わってきました。介護士の人も一緒におどることで、おじいさんやおばあさんをサポートしている姿が心に残りました。

それから、おじいさんとおばあさんと一緒に話をしました。私たちBグループの自己紹介は、一人一人、うまくできました。でも、その後、何を話題にして話せばいいのかわからなくなったのですが、それでも、おばあさんたちは、私たちを温かい目で見えてくれて、心がほわっとしました。お年寄りの人たちには、きつと、人の心をなごませる、秘密の力があるのかなあと思いました。

最後の玉入れでは、おじいさんとおばあさんと同じチームになって、競い合いました。最初は、おじいさんとおばあさんからでした。Bチームは、三個と少なかったので、私たちがそれをばんかいしようと二十二個入れました。ですが、合計点で、Aチームが三十三点で負けてしまいました。くやしい気持ちもありましたが、おばあさんたちを応援したり、逆にわたしたちを応援してくれたりすることで、おばあさんたちと心と心が通じ合えた気がしました。

さわこ訪問をふり返って、おじいさんとおばあさんと仲よく交流することができたのは、おたがいの歌やおどりを楽しみ、拍手や応援をすることで、なごやかな時間をつくれたからだと思います。

実際にさわこ訪問をして、お年寄りの方々のやさしさを感ずりました。今回のような体験から、私の夢も少しずつ変わってきました。それは、介護士の仕事をやってみたいという気持ちになったことです。

今回の体験で、おじいさん、おばあさんから笑顔をもらったように、今度は私が、おじいさん、おばあさんを助けて、笑顔にすることができるようになりたいです。

また、さわこに行つて、おじいさん、おばあさんと、一緒に楽しく交流したいです。待っていて下さい。

私は、東日本大震災という辛い経験から学んだことがあります。それは、自分以外の人への気遣い  
です。

東日本大震災という天変地異が私が小学校三年生のときに起こりました。まだ幼かった私ですら、  
すぐに命の危機を感じました。今でも地震が起きているときの光景を鮮明に覚えてます。学校の校庭に  
避難してすぐに母が私と兄を迎えに行ってくれました。その時、私の頭の中は、「自分はもうなつてし  
まうのか。」と自分のことで精一杯でした。しばらくして襲ってきたのは、大きな大きな津波でした。  
私自身が実際に見たわけではありませんが、ラジオから聞こえてきたのは、現在私たちのふるさとをの  
み込んでいく黒くて大きな波でした。みなれていた美しい海ではなく、人々の命と希望を簡単に消して  
いく怖い物になってしまったことを伝えるラジオアナウンサーの声でした。

私は、あの大津波で大切なものを失ってしまいました。大好きだった祖父・祖母と私が産まれた前か  
ら祖父と祖母の家で飼っていた一匹の犬。あの地震の津波がなかったら失わずにいた命が一瞬で消えて  
しまいました。もしあの日の出来事がなかったら、春休みに遊びに行っていたはず。もしあの日の出来  
事がなかったら、今も笑っていたはず。そんなもしもが虚しく頭の中をグルグルと回り続けては、止ま  
ることはなく、私の心には大きな穴が空いたかのような感覚でした。

あの日からしばらくして、テレビで若い男性が近くに住んでいる高齢者に声をかけたり、担いで避難  
したというのを見ました。あの日、私は自分のことで精一杯だった私とは逆に、周りの人を気遣いな  
がら自分以外の人の命を助けていたのです。あの震災でたくさんの人が犠牲になりました。でも、テレビ  
で見た若い男性のおかげで一人や二人の命は助かったのです。

震災後の防災教育の授業ではそれから、「自分以外の命を守る」と言うことを教えてもらいました。  
少なくとも良いんです。自分が守る側の人間になろうと私は思うようになりました。

震災という辛い経験から学んだこと。それは、「人を気遣う気持ち」を持つこと。体が不自由な人  
や、高齢者、小さい子供たちのことを気遣うことが大切だと、すごく辛い経験だったけど、すごく大切  
なことを学びました。震災や、災害はいつ起きるか分からない。でも、その時にとる行動で助かる命が  
あるということ。それを一人一人がやることによつてたくさん命が助かると思います。

前に、バスがとても混雑していた時に、高校生が席から立ち上がり、近くにいた高齢者に席を譲る姿  
を見ました。あたりまえのように思えるけど、すごく勇気が必要なことをすぐにできるのは、かっこい  
いと思います。そんな小さな気遣いから、いつか大きなものになり、いつか人々が安心して生活ができ  
る日が来ると思います。私たちが住んでいる釜石市もまだ復興の途中です。一人一人の気遣いでよりよ  
い釜石市をつくりあげることができるとだと思います。辛い経験から、新しく大切な事を学  
ぶことで、心地よい生活や、安心した生活をおくれるのなら、前向きな考えをし、今自分に考えるべき  
です。

小学生のころは暇さえあれば、よくあそんでもらっていました。私が中学生になると、部活動や勉強でいそがしくなりあまり会うことが無くなっていきました。中学校という新しい環境に慣れてきた頃、叔父は梯子から落下し泡を吹いて病院に搬送されました。ただただ不安だった私は病院にかけつけました。でも、看護師さん達がせわしなく叔父の周りで動いていて近くにいくことができませんでした。ただ遠くから見る事しかその時はできませんでした。遠目でも、ぐったりと横たわり嘔吐している姿を見て、元気だった頃の姿が思い出せなくなりました。数日後、家族でお見舞いに行きました。叔父は何もしゃべりませんでした。ただぼうっと空を見つめ精力が抜けた様子を見て、心配よりも恐怖心が芽生えました。人はここまで変わるのか、とさえ考えはじめました。親の「その内よくなるよ」という言葉を信じるしかありませんでした。しかし一向に良くなる気配は無く、身体もどんどん痩せ細っていきました。見るたび見るたび細くなっていったのです。私は叔父に会うのがだんだん怖くなっていました。次会う時、もっと酷くなっていたらどうしようと考えてようになっていました。数ヶ月かけて施設に移ることが決まりました。私は、移ったところで結果は変わるのだろうか、疑問を抱いていました。そう思いながら恐る恐る会いに行くと、そこには元気な叔父がいました。口数も増え、顔もぷっくりとして驚いたほどです。病院では無かった人との関わりが増えたからだと思います。体の自由はまだきかないものとても嬉しかったのを覚えています。それから叔父を怖いと思わなくなりました。むしろ会うのが楽しみになりました。

それから私は、少しずつ病気について調べました。一番衝撃を受けたのは、奇形による難病です。遺伝の関係や生活環境によるものが多くありましたが、その中でも叔父と同じ事故によるものもありました。一般的に奇形は、常識ではあり得ない容姿をしたものの事を言い、そのせいからか差別を受ける人が多くいると知ってとても悲しかったです。でも私が叔父に対して「怖い」と思ったことも、差別になるんじゃないかと思いました。一般的常識と少し違うだけで、「かわいそう」など思うことは、その人々たちを差別してるのと変わらないことだと思ひ深く反省しました。叔父のように病気をかかえていたり、奇形をもって生まれた人達だって、私達と同じように生きています。苦勞することや窮屈な思いをするようなことがあっても、それを私達が支えていくべきだと思います。そうやって助け合えば、皆がもっと幸せになるはずです。叔父を通してこのような事を知ることができて本当によかったと思います。人を思う気持ちを大切にしていきたいです。

私は将来人のために役に立つ仕事に就きたいと思っています。そこで職場体験に選んだのが老人ホーム「あいぜんの里」です。そしてその老人ホームは去年の冬亡くなった曾祖母がお世話になった施設です。ある日、曾祖母は、胃ガンになり病気をしてから弱くなってしまい、その後認知症になりました。日に認知症はひどくなり、食事をとつてもすぐに食べていないと言いだしたり、着る服も夏でも冬のセーターを着てみたり、おこりやすくなったり、トイレも一人で行くことも困難になりました。家で面倒を見るのは、とても大変なことです。老人ホームにあずけることは仕方のないことだと思います。介護している人にも限界があり、肉体的、精神的にもまいってしまいます。だからこそ介護施設などのサービスを利用して行くことも必要だと私は思います。

職場体験でたくさんのことを学びました。まずは、車イスの使い方を教わりました。簡単に動かすことができると思っていました。とても体力がいりました。逆に車イスにのせてもらい後からおしてもらいました。段差を下がる時など後が見えないのでこわかったこと。お昼には食事の準備や施設の人に食べさせてあげました。食事はその人に合わせた料理でした。例えば、食べるものを細かくしたり、ミキサーにかけやわらかくしたりしていました。食べさせるとき苦労したのは、のどにつまらせないようにゆっくり食べさせたことです。また、看護材料を作るお手伝いをしました。布とガーゼを使い棒状にしたりしました。一つ一つ施設の人のために気持ちを込めて作業することができました。

この二日間は貴重な2日間でした。職場体験をして、人のために役に立つような仕事に就きたいと、さらに強く思いました。

今、私のまわりでは認知症になった人がたくさんいます。他人事として感じるのではなく、自分の問題として気になる様になり認知症の方の接し方を調べました。頭ごなしに否定しない、失敗はせめない、プライドを傷つけない、正面から話しかける。これらのことは介護している人には、大変かもしれないけれど気持ち一つで優しくしてあげられると思います。できていることはほめてあげる、子供あつかいはしない。介護している人の大変さを知りました。

曾祖母は施設でなくなりました。あいぜんの里でお化粧をしてもらい家に一度帰ってきました。化粧をしていた曾祖母の顔は、どこかうれしそうな表情でねむっているように見えました。何歳になっても一人の女性として綺麗にしてもらったこと、きつとよろこんだと思います。

現在、大平中学校では、避難訓練や防災、避難所運営に力を入れています。お年寄りに使いやすい避難所をデザインするために高齢者体験などもおこないました。お年寄りの身になって考える、感じることを大切に私はこれからも学び続けていきたいと思っています。

佳作 「わたしの大好きなおじいちゃん」

釜石市立甲子小学校

四年 伊藤 結芽(いとう ゆめ)

私のおじいちゃんは、のうこうそくという病気になって体の右半分が動きません。車いすに乗って生活をしています。

私が一年生の夏休みの時に、おじいちゃんがたおれました。それから半年間、北上の病院でリハビリをしました。たい院してから家に帰ってきていっしょに生活してみると、たくさん大変なことがあるなど感じました。

おじいちゃんは、言葉が話せなくなったので、会話ができません。何かをつたえたいときは、「うーうー」。

と言います。わたしと弟は、おじいちゃんが何を言いたいのかわからないので、お母さんをよびます。お母さんは、おじいちゃんの動きを見ると、つたえたいことがわかるので、すごいなと思います。

わたしと弟は、

「おじいちゃん、ごはんだよ。」

とよんであげます。そうして、食事のじゅんぴをしてあげると、左手でスプーンを使ってごはんを自分で食べることができます。その他にもおじいちゃんは、自分で歯をみがいたり、トイレに行ったりもしています。自分でできることは、できるだけ自分でやろうとがんばっていると思います。

また、家の中では、おじいちゃんが車いすで通る場所には物を置けないので、気をつけて生活をしています。お風呂に入る時間は、マットをしくと車いすは通れなくなるので、おじいちゃんの歯みがきが終わってから入るようにしたり、家族でいろいろなことをくふうしたりして生活をしています。家族でおじいちゃんがろう下を通りやすいようにくふうしていると思います。

家でできないお世話は、アミーガはまゆりというしせつに行ってお世話をしてもらっています。一週間に四回デイサービスにも通っています。その時は、朝、家までむかえにきてもらいます。デイサービスの日は、自分で着がえをして時間になるまでテレビを見て待っています。おしゃべりはできないけど、デイサービスでお友達と会えるのを楽しみにしているのではないかなあと思いました。土曜日は、わたしも見送りをしています。しせつの車は、車いすに乗ったまま乗ることができる機の方がいいので、すごいなと思いました。はじめて見たときは、弟と車の中を見せてもらいました。中が広くて、六人くらい乗れるのが、すごいと思いました。

おじいちゃんが病気になって三年になりました。はじめは大変だなと思うことがたくさんあったけれど、今は少しなれてきました。いっしょに話をしたり、遊んだりはできないけれど、これからもおじいちゃんを助けながら、みんなで生活していきたいと思っています。